

岩手山周辺地域の持続可能な地域デザインについて

岩手大学 正員 安藤 昭 正員 南 正昭
 正員 赤谷 隆一 ○学生員 中居伸明
 学生員 平野裕一

1.はじめに

平成10年4月以降活発化した岩手山の火山活動は、岩手山麓周辺地域の農林業、観光業等の地域経済に多大な被害を与えた。さらに岩手山麓地域は、雄大な自然が生み出す景観と高山植物や野生動物が豊富に存在することから、貴重な地域遺産（自然・文化・産業）を有する地域として広く知られているが、火山活動の影響はこれらの地域遺産の存在を脅かすばかりではなく、持続可能な地域社会の形成を妨げるものであり、持続可能な地域づくりの理論構築が必要とされている。

そこで本研究では、感覚統合理論による都市景観設計の体系化、日本の都市の原型である里山等に関する研究などを踏まえて、地域の本質の解釈につとめ、岩手山周辺地域において持続可能な地域づくりの体系化手法の確立のための実証的研究を行う。

2.研究対象地域の概要

研究対象地である岩手県松尾村は、人口7,069人（平成15年12月31日現在）、総面積234.85km²、岩手県の北部に位置し、北東から南東に十和田八幡平国立公園を擁し、南西に主峰岩手山を抱く緑豊かな町である。

昭和20年代には、松尾鉱山での硫黄の採掘精錬により活況を誇ったが、昭和30年代以降、十和田八幡平国立公園を中心とする自然資源を利用した大型観光地化を図り、スキー場、温泉街、ペンション街等を開発し積極的に活用している。

また、平成2年には岩手県内初の景観条例を制定し、その後も各種の施策により、景観保全、景観づくりに力を注いでいる自治体である。

3.研究の方法

現存の景観を分析するためには、景観要素間で相互に関係しあっている景観要素の形態と植生や地因子、さらには郷土祭事などの動的要素に関する情報を風土とし、世の中の事象はすべて相互依存しているという「系」の視点から解析をおこなうことが肝要である。

従来は、このような複雑な景観システムに関する情報を個別に、アナログ的に解析し、景観設計を行ってきた。しかしながら、従来の手法では、プランナーの感性や習熟度に因るところが大きいため、本研究ではGIS（地理情報システム）を用いて、景観要素のデータベースとして、個々の要素単位でその位置情報と属性情報を関連させて管理し、場所や属性情報の効率化を図った。

（1）記憶素材採取調査の結果から得られた地域資源、イメージ再生率、位置情報についてのデータベースを構築した。これを

GIS上で表現することにより、評価主体が持つ、村の言語的イメージ構造の把握を容易にする。ここでいう評価主体とは、ローカルイメージのキューピックモデルに基づくもので、特に、今後農村地域の景観は、開かれた美しく個性豊かな景観として育成していく必要があるとの認識から、評価主体を住民・転出者・来訪者として選定し、構築されたものである。（2）村の意味的イメージ構造を把握するために、制限イメージ連想調査を行い、連想階層図を描き出し、地域デザインのためのデザインテーマを創出する。

（3）地域デザインのためのデザインテーマが、火山災害によって受けける影響を把握するために、岩手山火山災害対策図と地域資源の分布をオーバーレイし、デザインテーマについて考察する。

4.結果および考察

(1) 村の言語的イメージ構造について

図1、図2に評価主体別の言語的イメージ再生要素の分布およびイメージ強度を挙げる。

定住者、転出者、来訪者の3者の共通イメージは、「自然」「交流施設」「観光・レクリエーション施設」のキーワード群と「松尾鉱山」である。自然として再生された要素は八幡平に代表される国立公園一帯に分布する要素であり、松川温泉、八幡平温泉郷、安比高原等の全国的に有名な要素に加え、盛岡市民を来訪者として選定したことから、気軽に訪れられる直販売施設である松ちゃん市場やトラウトガーデン等が再生された。また、この他にも、定住者に固有、定住者・来訪者に固有などの状況も直感的に把握することが可能である。

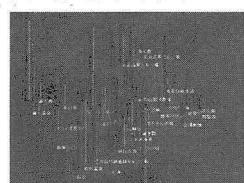


図1 評価主体別の村の
イメージ分布及び
イメージ強度

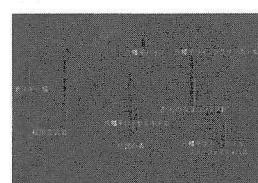


図2 評価主体別の村の
イメージ分布及びイメージ
強度（拡大図）

(2) 地域デザインのデザインテーマの創出

地域デザインを考える際、当該地域の風土イメージを抽出することによって得られた記憶素材に意味づけをし、都市のフィジカルパターンとエコシンボルを重ね合わせ、象徴化することにより描き出された都市形態と、各々のコンフリクトを調整し、オーバーレイしてデザインテーマを与えるという、

創造的行為が行われる。デザインテーマを描き出すことは、地域住民の地域づくりに対する意欲を醸成させるとともに、プランナーが説明責任を果たす為の重要な道具である。

本研究では、記憶素材採取調査により得られた地域資源の中から、松尾村をよく表している言葉、36語を刺激語として選定し、制限イメージ連想調査を行い、連想階層図（図3）を描くことにより、各刺激語のもつコンテキスト（相互依存関係）を把握した。

連想階層図は、縦軸にイメージウェイトをとり、この値が大きいほど他の刺激語からの連想確率が高いことを示す。イメージウェイトの大きな語は多くの語のイメージを内包するといえる。そこで、イメージ想起の集中度が大きい語を「上位概念」とし、イメージウェイトを用いてその位置を与える。想起パターンとともにイメージ構造を階層表記する。また、イメージウェイトは、36個の刺激語がすべて均等なウェイトを持った場合、その値は2.778となる。したがって、ウェイト2.778以上である「八幡平」、「岩手山」、「松川温泉」など14の刺激語は、そのイメージ吸引力の大きさにおいて平均以上であり、制限イメージ連想上、重要な語であるといえる。

以上の分析結果を踏まえ、地域デザインのデザインテーマの創出を試みる。連想階層図から、八幡平が松尾村全域のイメージを包含していることが見て取れる。さらに岩手山も松尾村の象徴として存在しており、それらの裾野に広がる安比高原、長久保牧野・前森山集団農場を含め、広大なる大地を表すように、デザインテーマのキーワードを「八幡平山系」とした。

また、松川温泉、雪、新中和処理施設、さらには前述の八幡平山系が抱える分水嶺を持つ松尾には、数々の言い伝えを持つ湧水群があり、かつ、それらの多くには水の神が祀られていることからデザインテーマのキーワードを「靈水の郷」とした。

これら2つのキーワードから、松尾村における地域デザインのデザインテーマを、

「古より伝わる、八幡平山系に抱かれし靈水の郷」とした。

(3) 火山との共生を目指した地域のデザイン

岩手山との共生を目指した地域デザインを行うためには、前述（2）で創出されたテーマが、地域の生活と生存の機能をも含むテーマでなければならない。岩手山は当該地域の風土でありエコシンボルである側面を持つ一方、火山災害により地域の生活と生存を脅かすものもある。そのためデザインテーマが火山災害により受ける影響も検討しておく必要がある。

地域資源が火山災害により、どれ程の影響を受けるのかを把握するために、地域資源の分布状況と岩手山火山災害対策図をオーバーレイした（図4）。

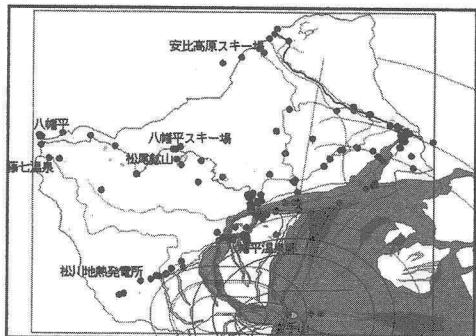


図4 地域資源の被災予想図

これにより村内の地域資源の約半数が火山災害の影響を受けることが見て取れる。現在の松尾村のイメージ構造は、言語的、意味的さらに空間的にも大きく変化してしまうと考えられる。デザインテーマと比較してみると、例えば、キーワード「靈水」に関係する地域資源としては、金沢清水、長者清水、長者屋敷、天照皇太神宮、伊那々伊澤神社などが火山災害による影響を受ける。これらの地域資源の喪失はデザインテーマを揺るがすこととなり、不安定なデザインテーマの下での持続可能な地域社会の形成は困難である。このため、これらの地域資源をどのように守っていくかが、今後議論されていくべきことである。

5. まとめ

本研究により、地域デザインを考える際に重要なデザインテーマが、実証的に蓄積したデータを基にし、方向性を指し示すことができた。さらには、GISを用いることにより、従来、個別に解析を行っていた場合には見られなかった新たな情報が生み出されると同時に、視覚的な、直感的な了解を容易にした。このことは地域住民に対する説明責任を果たす一つの手段であるとともに、地域住民を「住民参画」というフィールドに引き出すために有用な手段であると考えられる。

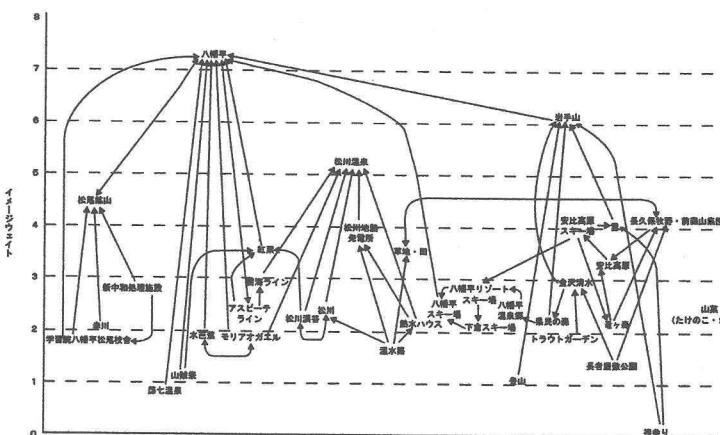


図3 制限イメージ連想法により描画された連想階層図